札幌で暮らした白虎隊唯一の生存者

飯沼貞吉

少年たちの悲劇として今も語り継がれる白虎隊。その唯一の生存者で、生涯を電信電話の発展にささげ、札幌の通信分野でも大きな貢献をした飯沼貞吉を紹介します。

飯沼貞吉は、安政元年（一八五四）年に会津藩（現在の福島県）の飯沼時衛の次男として生まれました。慶応四年（一八六八年）一月、鳥羽・伏見の戦い、戊辰戦争と厳しい局面を迎えていた会津藩は、全軍を年齢別に四隊構成とする、フランス軍の隊編成を参考に軍制改革を行い、その一つで、十六、十七歳の最年少の隊士「白虎隊」を組織しました。

飯沼は、当時十五歳でしたが、年齢をごまかして入隊しました。出陣に際し、母は、「ひきょうな振る舞いをしてはならぬ」と言って送り出したそうです。

白虎隊は、日夜激戦を重ね、同年八月飯盛山（福島県）にたどり着きました。砲煙が上がる鶴ケ城を見た少年たちは、絶望と疲れ、負傷、空腹のため次々と自決しました。飯沼も脇差を力一杯にのどに突き刺し、自決を試みましたが、通り掛かった足軽（下級武士）の妻ハツに助けられ、長岡藩の軍医の手当てよって、一命を取り留めることになりました。こうして飯沼は、白虎隊唯一の生存者となったのです。

明治元年（一八六八年）に貞雄と改名した飯沼は、「生きるのが辛く、会津には帰ることには耐えられない」と一度も帰郷することはなく、十八年（一八八五年）に逓信省技師となり、三十八年（一九〇五年）から五年間、郵便局工務課長として札幌に赴任しました。

赴任から二年後には、三百七十戸余りを焼失する大火が発生し、郵便局も類焼してしまいましが、飯沼は、仮庁舎となった札幌農学校演武場（現時計台）で通信業務を継続しながら、復旧工事にも全力で取り組みました。また、札幌や小樽などの電話局の交換方式を単式から複式にする改良工事も監督し、完成させました。その後、仙台逓信局工務部長で退職するまで、日本の電信電話の発展に生涯をささげ、昭和六年六月、七十八歳でこの世を去りました。

ホテルルーシス札幌（旧ＮＴＴ札幌会館）前に建つ飯沼貞吉の記念碑

時が流れ三十二年九月、飯盛山に飯沼の墓が建てられました。白虎隊の仲間と別れてから九十年の歳月が経過し、やっと十九人の同志の元へ帰ることができたのです。また、平成元年には、飯沼の遺徳を後世に残すため、札幌会津会とＮＴＴ北海道支社が協力して、かつて札幌で暮らした場所（南七西一）に「会津藩白虎隊士飯沼貞吉ゆかりの地」と刻まれた三角の碑を建てました。

（平成十四年十一月号・第八十六回）